大平洋戦争終結の詔書

佐伯市木立　木許　博　直訳
佐伯市海崎　汐　月三代吉　編集

まえがき

先日佐伯史談会の吉水森氏より市内の古書店で見つけたと古新聞を拝見した。それは昭和二十年八月十五日の毎日新聞の朝刊で、それには我々がお昼に聞いた天皇陛下の玉音放送の「詔書」が印刷されている。

丁度今年は六十年の節目になり私達も皆傘寿を迎え当時を回想する強烈な印象のあるものだったので、早速老健施設サンビュー南海の方にデイルームに展示してもらったが、現世代の方々にはなじみが薄く文面も理解し難いとてあまり関心がない。

それはそうだろう、吾々が今改めて読んでみても中々すらすらと読めて理解の出来る文章ではない。然しこれは名文でもあり、分かり易い現代文にして広く皆から読んで貰ったらと、早速木許氏に依頼し、解読をして頂いたものです。

汐月三代吉

詔書

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現狀トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ抑〻帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戰セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戰已ニ四歲ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ奉公各〻最善ヲ盡セルニ拘ラス戰局必スシモ好轉セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戰ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五

朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世
ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス
朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ若
シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ
信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク舉國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不
滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏ク
シ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク
朕カ意ヲ體セヨ

御名御璽

昭和二十年八月十四日

各國務大臣副署

直訳

国民に告げる

私は心をこめて世界全体の情勢と日本帝国の現状を考察し、非常特別の処置をもって、今日の時勢の成り行きをととのえおさめようと願い、この度忠誠善良な国民の皆さんに告げます。私は日本政府に米国・英国・支那（しな）・蘇聯（それん）に対して、この度の共同宣言（ポツダム宣言）を受け認めるように連絡返答させた。

ところで、我が国民がやすらかにおさまることを願い、世界全体がともに栄える喜びを共にすることは、我が天皇の先祖や歴代の天皇の残した手本であり、私がつとめ心がけていることであり、以前に

米・英両国に戦を宣言した理由もまた、まことに我が国の生存と東アジアの安定とを請い願うからであり、他国の主権を押しのけ、領土を侵すようなことはもちろん私の思うところではない。しかしながら戦争はもう四年を経ており、我が陸海将兵の勇ましい戦いぶりや、我が多くの役人たちの骨折りや、一億国民の国への奉公など、それぞれ最善を尽くしたにもかかわらず、戦の成り行きは必ずしも好転しないで、世界の大勢もまた我が国に不利であり、その上に敵は新しく残虐な爆弾を使って罪のない者をむやみに殺傷し、悲惨な被害の及ぶことは実に想像もできない情勢になった。それでもなお戦を続けるとすれば、ついに我が民族の滅亡を招くだけでなく、それに引き続いて人類の文明を破滅させるであろう。そうなった場合は私はどうして万民を守り、先祖や歴代の天皇の御霊に報いることができようか。これこそが、私が我が政府に共同宣言を受け入れさせるに至った理由である。

私は我が国とともにこれまでずっと東亜の解放に協力してくれた友情同盟の諸国に対して残念の気持ちを表さずにはいられない。我が国の国民で戦陣に死に、職務に命を捧げ、不運にして亡くなった者など、その遺族に思いをいたすと心が裂ける思いがする。又さらに、戦に傷つき災いを受けて家業を失った者への厚生福利のこととなると極めてつらい思いがするのである。思えば今後我が国が受ける苦難は尋常なものではなく、国民一人一人のつらい心の中はこの私も十分に解るのである。とはいえ、時勢の流れ、成り行きを考えるとき、こらえきれない苦しみを我慢し、我慢ならないのをさらに我慢して遠い我が国の将来のために恒久の平和を開こうと願うのである。

私はこのときにあたり、我が国を護り保って、忠誠善良な国民一人一人の純粋誠実な心をよりどころとし信頼して一人一人の国民とともに常に在るのである。

仮にもし感情が高まるままに争いのきっかけを多くし、または国民同士で互いに押しのけ争って時勢の成り行きを混乱させ、そのために大筋の道を誤って、世界から信頼を失うようになることは私としては最も用心したいことである。どうか国が一つ心になって子孫に至るまで長く堅く日本国永遠の繁栄を信じ、国を興す任務は重く、道のりは遠いことを思い、すべての力

を将来の建設に傾注し、人の道、誠の心を重んじ、守るべき志をしっかりと持ち、必ず国としての秀でた真価をあげ表して、世界の進歩の成り行きに後れないように心がけることを望むものである。どうか国民一人一人が私の考え、真意を身につけて守ってほしいと願うものである。

語の説明

詔書【しょうしょ】みことのり〈天子の命令〉を書いた文書。
朕【ちん】天皇の自称。わたくし。
鑑【かんが】みる　照らして考える。考察する。
措置【そち】処置。始末をつけること。
茲【ここ】に　いま。この際。
爾【なんじ】汝。おまえ。相手を指す語。
支蘇【しそ】中国（支那）とソビエト〈蘇聯〉。
抑々【そもそも】いったい。さて。
康寧【こうねい】世の中が安らかにおさまる。
萬邦【ばんぽう】全世界。
偕【とも】に　いっしょに。ともにする。
皇祖【こうそ】天子の先祖。皇〈すめらぎ。すべらぎ。すめら。大君。〉
皇宗【こうそう】歴代の天皇。
遺範【いはん】のこした手本。模範。
拳々【けんけん】つつしみつとめる。
措【お】く　すてておく。
曩【さき】に　以前。さきの時。
所以【ゆえん】いわれ。わけ。理由。
自存【じそん】自己の生存。
庶幾【しょき】こいねがう。
閲【けみ】す　経る。調べる。
百僚【ひゃくりょう】百官。多くの役人。
有司【ゆうし】役人。
衆庶【しゅうしょ】人民。庶民。
加之【しかのみならず】「之に加える」そればかりではなく。その上に。
無辜【むこ】罪とがの無い。
延【ひい】て　それが原因となって。ひきつづいて。
億兆【おくちょう】万民。限りなく多い数。
赤子【せきし】人民。天子を親に見たてていう語。

遺憾【いかん】ざんねん。気の毒。
斃【たお】る　死ぬ。
五内【ごない】五臓。心。
軫念【しんねん】天子が心をいためる。
衷情【ちゅうじょう】心の中。
趨【おもむ】く　行く。通る。
萬世【ばんせい】万代。永遠。
太平【たいへい】世の中がよく治まる。
國體【こくたい】くにがら。くにぶり。
赤誠【せきせい】まごころ。赤心。丹心。
信倚【しんい】信じてたよりとする。
濫【みだ】りに　むやみに。
事端【じたん】あらそいのきっかけ。
滋【しげ】くす　ふやす。多くする。
排擠【はいさい】人をおしのけきらう。
確【かた】く　よく。しっかりと。
神州【しんしゅう】神国。日本の美称。
志操【しそう】守って変えぬ心。
鞏【かた】く　しっかりと。
精華【せいか】すぐれてうるわしいこと。
克【よ】く　充分に。
體【たい】体。身につけて守る。
御名【ぎょめい】天皇の名。
御璽【ぎょじ】天皇の印。

あとがき

このたび思いもかけず「終戦の詔書」の訳を汐月氏から頼まれ、六十年前の二十歳の青春のあの衝撃の体験を思い出しながら筆をとりました。なにしろ「詔書」とか「勅語」「勅諭」の文は、宮中に関する特殊な言葉や文体が使われているため、これを普通一般にわかるようになおすことは、かなり骨が折れるけれども、平たくやさしくなりすぎては趣意から離れてしまうおそれがあるし、本文にくっつきすぎると理解がしにくくなりそうで、その点の兼ね合いに気を使って取り組んでみました。いきおい「直訳」（逐語訳）の形（原文の一語一語に即して忠実に言い直す）になりました。「語の説明」を参照しながら読んで欲しいと思います。

木許　博